


前回私たちは、パウロが、カイザリヤにおいて総督フェストによる裁判を受けた結果、またアグリッパ王の前での弁明の結果、彼のローマ行きが決まったことを見ました。それは彼らをして、パウロのうちに投獄や死に当たる罪を認めたからではなく、パウロ自身がカイザルに上訴したからです。その内容については、教会ホームページに前回のメッセージがアップされていますので、そちらをお聴きください。2017年の1月から始まり、この「使徒の働き」のシリーズも残りわずか（2章）となりました。今読んでいただいたように、いよいよパウロが念願のローマへと向かうところです。

 前の地図を見て下さい。今日は、ここに記されていることを細かく見ることはできませんが、パウロたちがどのようにしてローマへと向かったかを確認します。まず彼らは、カイザリヤから船でシドンに向かいました。この町は、エルサレムとアンテオケとのおよそ中間地点にありましたので、パウロはそれまで何度かそこに立ち寄ったと思われます。そういうこともあり、またローマの親衛隊の百人隊長ユリアスの好意もあって、パウロはその友人たちとの交わりを許されるのです。その後、航海を続け、ルキヤのミラに入港します。そこから、さらに西に進みますが、向かい風のため、それ以上進むことができず、クニドの沖に着いた後は、進路を南に変え、クレテ島の島陰を航行し、島の南側に位置する「良い港」と呼ばれる所に到着します。

その港の近くには、ラサヤという小さな町がありましたが、そこは冬を過ごすのに適していなかったため、彼らはさらに航海を続け、できれば島の西側に位置するピニクスまで行こうとします。ところが、その際、ユラクロンという暴風に巻き込まれ、地中海を漂うことになってしまうのです。そこまでが今日の箇所ですが、その続きも簡単に見えます。地中海を漂流して、およそ14日後、彼らはマルタという島に辿り着き、何とか助かるのです。そして、そこから再び出帆することができ、その結果、ローマに到着します。

このパウロのローマ行きを思う時、「自分だったら、こんな目に遭いたくない」と誰もが思うことでしょう。豪華客船で行く、ヨーロッパ旅行ならまだしも、荒れ狂う地中海を漂流するのがわかっていたら、誰もそんな旅はしたくないと思います。けれども、囚人であるパウロには選択肢はなかった。彼としては、このようなことになると予測ができ、そして人々に忠告したにも関わらずです。10節「皆さん。この航海では、きっと、積荷や船体だけではなく、私たちの生命にも、危害と大きな損失が及ぶと、私は考えます」。

パウロはなぜこのように言ったのでしょうか？そのすぐ前を見ると、こうあります。9節「断食の季節もすでに過ぎていたため、もう航海は危険であったので」。断食の季節とは、律法の定めによれば、贖罪の日（レビ23:26 - 32）、太陽暦の10月頃にあたりますが、その時期、地中海は大変荒れるため、10月中頃から3月始めまでは航海は完全に休止され、さらに5月中旬までと、9月の中旬からは、航海は危険とされていました。またパウロは、それまでの経験から「難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります」（Ⅱコリ11:25）と述べていますから、地中海の恐ろしさを彼は十分に知っていたのです。それゆえに、百人隊長ユリアスを何とか説得しようとしています。

けれども、ユリアスは、パウロではなく、航海士や船長の意見に耳を貸すのです。また12節に「大多数の者の意見」とありますから、同船した人の多くが、そこを出帆し、約60-70キロ（40マイル）離れた同じクレテ島の西側の港ピニクスまで行き、そこで冬を過ごすことを願ったので、彼らはパウロの忠告を退け、そこを出帆しました。ところが、そのような判断ミスが、自分たちの身に大きな災いをもたらすのです。人災といっても良いでしょう。ただユリアスをして、彼が航海に関して素人のパウロよりも、それを専門とする航海士や船長の意見に耳を貸したのは、ある意味では当然のことといえます。彼らが大丈夫と言うんだから、きっと大丈夫だろう、と思ったのでしょう。

では、なぜ航海士や船長は、そのような判断をしたのか？結果は、決して大丈夫ではなかったわけです。すでに説明したように、この時期の航海が危険なことは、一般的に知られていました。つまり、それは、別に専門家でなくても、パウロのように航海の経験がある人ならだれもが知っていたこと。にも関わらず、彼らはそのリスクを知らながら、あえてピニクスまで行くことを決断をしました。なぜですか？その良い港、またその近くの町ラサヤが、冬を過ごすのに適していなかったからです。つまり、彼らは正しさや安全さよりも、快適さを

優先させることで、彼らのうちで考えに甘さが生じ、地中海の恐さを見せなくさせ、誤った判断へと彼らを導きました。

そして、その判断ミスは、同船していた276人のいのちを危険にさらすことになったのです。彼らとしては、おそよ60-70キロほどの距離でしたから、何かあっても何とかなると考えたのでしょう。これまでの航海も、向かい風の中を守られてきたのだから、もう少しくらいは大丈夫だと高をくくったのだと思います。でも、そのようなちょっとした油断が、現実を甘くみる心が、こうした困難を生み出す結果となったのです。

パウロとしては、このことが予測できたので、何とかして彼らを説得しようと試みました。でも、囚人の立場であった彼は、意見はしても、その結果は、彼らの判断に身をゆだねるしかなかったのです。そういう意味で、パウロもまた、自分の意に反して、このような災難に巻き込まれたといえます。そして、そのようなことは私たちもみな多かれ少なかれ経験してきたこと、またこれからも経験することです。自分は関係ない、反対したのに、誰かの判断ミスや失敗のせいで、困難に巻き込まれるということは残念ながらあります。

20節「太陽も星も見えない日が幾日も続き、激しい暴風が吹きまくるので、私たちが助かる最後の望みも今や絶たれようとしていた」。当時は、今のようにハイテクではなかったのに、太陽や星を頼りに航海したわけです。ところが、悪天候や激しい暴風のせいで、それらが見えない日が幾日も続いたので、自分たちがどこを漂っているのかもわからず、彼らはそこで死を意識します。「私たちが助かる最後の望みも今や絶たれようとしていた」とは、そういうことです。もしあなたが、このような目に遭ったら、どのような精神状態にあったと思いますか？主への信仰のゆえに、何の恐れもなく、主に賛美をささげ、平安のうちにおられたと思いますか？いかがでしょう？そのような中で、パウロは、人々の中に立ってこう語るのです。

21-26節「皆さん。あなたがたは私の忠告を聞き入れて、クレテを出帆しなかったら、こんな危害や損失をこうむらなくて済んだのです。22 しかし、今、お勧めします。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません。失われるのは船だけです。23 昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使いが、私の前に立って、24 こう言いました。『恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます。そして、神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです。』25 ですから、皆さん。元気を出しなさい。すべて私に告げられたとおりにすると、私は神によって信じています。26 私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます」。

まずパウロは、彼らが自分の忠告を聞き入れなかったことを持ち出すことで、その結果として、このような災難に遭ったと彼らの判断ミスを指摘します。当然のことと言えるでしょう。ただ、もし彼の言葉がそれだけで終わっていたならどうですか？それは意気消沈している人々にとって、何の助けにもなりません。でもパウロはこう続けるのです。「元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません」と。

このように語ったのがパウロなので、もしかしたら、この場面があまり印象に残らない人もおられるかも知れません。でもパウロ自身も同じ困難の中を通過していたことを考えるなら、これは実にすごいことです。よほど確信がなければ、こんなことは言えたもんじゃないからです。でも、確かにパウロには助かる、という確信がありました。そして、それが彼自身から出たものではなく、主から与えられたものであったゆえに、パウロは主の力、主の助けによって奮い立つのです。

というのも、主が、御使いを通してパウロに現れ、「恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます。そして、神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです」と語って下さったからです。「恐れてはいけません」ですから、パウロのうちにも恐れがあったといえるでしょう。主はそのようなパウロに、「あなたは必ずカイザルの前に立ちます」と、すでに約束しておられたローマ行きを再び語られることで、ご自分の約束を確かなものとされたのです。

またそれと共に、「神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです」と、同船の者たちがみな助かることも主は約束されました。私は、この主のことばの中に、主がパウロに対してもっておられたご計画が、決してローマでの証だけでなく、この時、彼とともにいる人々への証も含まれていたことを見

るのです。つまり、パウロにとって、ローマで主を証することは、主から与えられた願いであり、主ご自身がみことばをもって約束されることで、彼はそれを主からの使命、目標としていました。

でも、同時に主は、エルサレムだけではなく、ローマに行く前のカイザリヤにおいてもパウロを用いてご自身を証しておられたのです。ですから、この時も、パウロと共にローマに向かう人々に対して、主はパウロを通してご自身を証する計画をもっておられました。たとえ彼らが、パウロの忠告に耳を貸さない人々であったとしてもです。ちなみに、「彼らが信仰に入った」という報告は出てきません。でも彼らは、この後、助かることで、パウロが語ったことが、そのとおりになるのを確かに身をもって知るようになるわけです。

ここで心に留めたいこと、それはパウロが、「すべて私に告げられたとおりにになると、私は神によって信じています」と言ったことです。皆さん、パウロは主から告げられたことばを信じました。それに対して疑ったのではなく、また聞き流したのでもなく、必ずその通りになると彼は信じたのです。ここが大事です！なぜなら、主はからし種ほどの小さな信仰でも、その信仰を通して働かれるお方だからです。もちろん、私たちが信じようが信じまいが、それに関係なく、神様には、ご自分の語られたことを実現することがおできになります。でも主は、あえてご自分とすることばに信頼する者を通して、ご自身の栄光を現わされるのです。

そのようにいうと、「自分にはパウロのような信仰はありません」という方がおられるかも知れません。そういう人は、「信じる」ということと、自分が何か神のようになることを誤解されている可能性があります。皆さん、私たちは、主を離れては、ただの罪人、その罪ゆえに滅び行く者でしかありません。誰も自分のうちに助かる望みなどもっていないのです。この人々にしても、彼らが地中海で漂流した結果、死に至るのも、助かった後、しばらく生きて死を迎えるのも、もし主の救いを受けていなければ、それはただ時間の問題であって、たどり着くところは皆同じです。

でも、だれひとりとして滅びることを望まない主は、ご自分が私たちの罪を負うことで、十字架にかかり、その身代わりの死、贖いの死を遂げて下さいました。私たちの罪に対する神のさばきを、主が代わりに受けて下さったのです。その贖いのゆえに、この救い主を信じるすべての者には、罪と滅びから救われる望みが、また神の子どもとされ、永遠にこの方と共に生きる、という望みが恵みとして与えられています。

ですから、パウロがここで信じたというのは、彼自身が強いからではなく、むしろ、弱いからこそ、そのことを知り、でも強いお方である主イエスに、彼は救いの望みを置いたのです。この方が、天地万物を創造された方、それを御手のうちに治めておられる神であるゆえに、その偉大な主と主のことばをパウロは信じました。「主が、御使いを通して告げられたのだから、そのことは必ずそのとおりになる」と。

いかがですか？今日あなたは、主のみことばをそのように信じておられますか？主は、聖書を通して、またご自身の御霊をもって、すべてご自分に近づく者に今日も語って下さいます。パウロのように、「ここぞ」という時に、特別な形で語られる経験をすることもあることでしょう。でも、それは普段から主のみこころを求め、みことばに聴こうとする歩みがあつてのことといえます。主が求めておられるのは、自分の都合のために主を利用しようとする人ではなく、主の愛を知るゆえに、主のためにいのちをささげて従う人だからです。

ですから、パウロのように、たとえ困難の中を通ることがあっても、そのただ中で、私たちが主を大胆に証できるよう、主はご自身の御霊とみことばをもって語り、励まして下さいます。そして、そのようにして主がご自身のすばらしさを味わわせて下さるので、私たちは、どのような時にも希望を失うことがないのです。主イエスこそ、私たち罪人が死からいのちへ、滅びから天国へと移されるための唯一の望み、希望そのものだからです。この主によって語られることは、必ずその通りになります。信じ従おうではありませんか！